

チーム医療：NST(栄養管理委員会)

—概要—

病院長より、患者の入院中の楽しみとして重要な位置を占める病院食について、「日本一美味しい病院食」を目指すよう依頼があり、当委員会の柱の一つとなっている。

また、外来レベルの「術前栄養サポート」も患者の体力維持、術後早期回復、在院日数短縮、費用削減のために重要と考えられ、当委員会の柱の一つとなっている。2022年度の総NST回診件数は、りんくう総合医療センター304件、泉州救命救急センター341件であった。

現在、栄養サポートチーム加算を算定できるようになっている。これには、保険医、看護師、薬剤師、管理栄養士それぞれが資格を有し、共同して診療を行うことが必要であり、栄養評価指標のための検査環境を整備し、患者説明の充実を果たし、患者と顔を合わせる回診内容を模索し、言語聴覚士等の協力を仰ぎ、各方面からの協力により成り立っている。本年度は、合計263件の栄養サポートチーム加算を算定できた。

当院は日本臨床栄養代謝学会の栄養サポートチーム専門療法士認定教育施設であり、NST専門療法士研修会は年2回実施しているが、2022年度は新型コロナウイルス感染症のため中止となった。

また、当院は泉州地区NST研究会の代表世話人を務めてきている。さらに、日本臨床栄養代謝学会のNST専門療法士認定制度において泉州地区NST研究会が認定されており、参加することによって2単位を取得できるようになっている。しばらく新型コロナウイルス感染の影響で中止となっていたが、2022年11月19日には第30回泉州地区NST研究会を開催することができ、当院からも演題を発表した。

院内ではNST勉強会を行い、栄養の基礎知識や最新情報の提供を行っている。栄養管理委員会には、栄養アセスメントグループ、マニュアルグループ、セミナー学習会グループ、摂食・嚥下ワーキンググループが存在し、それぞれ真剣に取り組んでいる。

当院NSTにおける現在の問題点と新しい流れ

- 1.低栄養で嚥下にかかわる筋肉の機能低下が起こると嚥下困難となり、低栄養がさらに進むという悪循環に陥り、誤嚥性肺炎も起こりうる。摂食・嚥下グループを中心に、嚥下の評価を行い、栄養を維持して嚥下筋の機能低下を防ぎ、また改善させ、悪循環からの脱却を目指している。
- 2.ERAS(Enhanced recovery after surgery)プログラムが広く

行われるようになり、術後早期にリハビリを行うようになってきたが、低栄養状態でいきなり行うリハビリは、かえって筋蛋白の分解をまねく。リハビリは栄養状態の維持とあわせて強度を上げていくのが理想的である。一方、若年者において骨格筋を保つために必要な最低限度の蛋白質のみを高齢者に投与すると筋の委縮がみられる。(成人0.8~1.0 g/kg/day 高齢者1.0~1.2 g/kg/day)高齢者ほど体重あたりの蛋白必要量が高い。

- 3.侵襲の大きな手術に先立って、術前に栄養状態を持ち上げ、術前リハビリで筋力アップをはかると、術後の回復が早く、合併症も減少する等の報告がなされてきている。術前に介入するために、外来レベルのサポートを目的とし、他分野(リハビリ、全身麻酔・術前のチェック・管理、薬剤管理、口腔ケア、精神サポート、医療事務等)との協力体制を構築することが重要である。
- 4.脂肪製剤の利用は、糖質中心の栄養輸液に比べて単位水分あたりの熱量が高いために、水分負荷の軽減となり、心不全や腎不全時に利点があり、ブドウ糖に比べてCO₂産生量が少ないために呼吸不全に利点があり、インスリン非依存性であるために耐糖能低下時に利点がある。さらに、脂肪は心筋や骨格筋のメインのエネルギー源であり、心疾患、リハビリを要する患者には重要と考えられる。脂肪の投与が細網内皮系をブロックして免疫に影響を与えるとの報告もあるが、投与スピードをコントロールすれば(0.1g/kg/h以下で投与)問題ないと考えられている。当院では、脂肪乳剤の使用がまだまだ普及しておらず、啓蒙活動が必要と考えられる。

—実績—

NST回診件数

	チームりんくう	チーム救命
4月	22 (20)	31
5月	21 (21)	11
6月	27 (26)	28
7月	35 (25)	40
8月	28 (21)	39
9月	24 (24)	47
10月	20 (15)	34
11月	9 (9)	20
12月	30 (27)	33
1月	24 (20)	12
2月	28 (23)	20
3月	36 (32)	26
合計	304 (263)	341

※()は加算件数

—今年度の成果と反省点—

当院は日本臨床栄養代謝学会の栄養サポートチーム専門療法士認定教育施設の資格を維持しているが、今後も資格更新のために厳しい条件があり、認定施設維持のための整備を怠らないことが重要である。

—来年度への抱負—

常に知識の吸収、技術の研磨を怠らないよう、学会発表に積極的に参加していきたい。

